



## 学び方を学ぶ

部長代理 勝木 茂

今年の夏は「危険な」と表現されるほどの猛暑日が続いたり、台風の上陸や接近による大雨の被害が各地であったりと例年にない厳しい夏となりました。

本日、松本講堂において、第二学期の始業式を実施いたしました。式の中で行われた代表児童による「二学期の目標」からは、どの子も目標に向かってどのように取り組んでいくのかが具体的に述べられており大変頼もしく感じました。代表児童のみならず初等部生全員がしっかりと目標をもち、その実現に向けて具体的にどのように取り組んでいくべきかについて、担任を中心に十分な支援をしていきたいと考えます。

今日から授業がはじまりましたが、まだまだ暑い日が続きます。保護者の皆様におかれましては、朝の健康観察、十分な水分の準備をはじめ登下校時における暑さ対策、熱中症予防等についてご配慮のほどよろしくお願いいたします。

さて、夏休み期間中に平成28年12月に示された「中央教育審議会答申」及び平成29年3月に告示された「小学校学習指導要領」を改めて読んでみました。その中で、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という目標を学校と社会が共有し、「連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子どもたちに育む」「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、「学習指導要領が、学校・家庭、地域の関係者が幅広く共有し活用できる「学びの地図」としての役割を果たすことができるよう、次の6点にわたって・

・ ※下線部分文部科学省小学校学習指導要領解説より引用と記述され次の6点が示されています。

- ①「何ができるようになるか」
- ②「何を学ぶか」
- ③「どのように学ぶか」
- ④「子ども一人一人の発達をどのように支援するのか」
- ⑤「何が身に付いたか」
- ⑥「実施するために何が必要か」

これらはどれも大切ですが、わたしは③「どのように学ぶか」について感じていることがあります。もちろん「どのように学ぶか」については、学校としての指導計画の作成や授業の工夫・改善・充実は不可欠ですが、わたしが感じているのは学ぶ側としての子どもの意識です。日頃、各教室での子どもの様子を見てみると、プリントやテスト、ドリル（特に選択問題や穴埋めの問題）は、教師が与えればすぐにやりはじめる子どもが多くいる反面、自分の考えをノートに書いたり、解決への手立てを見通しをもって考えたりする場面では、なかなかはじめられない子どもたちやともすると諦めてしまう子どもたちもいます。教師が考えを聞く発問をした時に目を輝かせながら「自分なりの根拠や理由を示しながら考えを述べる」子どもはそれほど多いとは言えません。

これは学習意欲が不足しているからでしょうか？確かに「分からない」ことが続けば、学習意欲は減退していくことが予想されます。わたしは、初等部生の学習意欲は決して低いとは思っていません。むしろ高い方だと思います。しかしながら「どのように学ぶか」、つまり学び方があまり身に付いていない子どもたちもいるのではないかと感じています。もちろん学び方は一朝一夕に身に付くものではありません。学び方は低学年（あるいはもっと小さな頃）から自分なりに試行錯誤しながら徐々に身に付いていくものだと思います。その過程では親や教師が学び方を示したり友だちの学び方をモデルにしたりといった経験が必要です。つまり学び方についての自分なりの積み重ねがよりよい学び方につながっていくのだと考えます。

これからは、今まで以上に解き方が決まっている問題を解く能力のほかに、問題を柔軟に受け止め、感性を豊かに働かせながら答えを求めていく力が、必要になってきます。初等教育の段階で学び方を主体的に学ぶことができる初等部生にご家庭と協力しながら育てていきたいと考えます。